慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョルジュ・バタイユの文学論の思想史的意義と現代的射程
Sub Title	The historical significance of Georges Bataille's theory of literature and its contemporary importance
Author	石川, 学(Ishikawa, Manabu)
Publisher	慶應義塾大学
Publication year	2021
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2019.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究の内容は、ジョルジュ・バタイユと、モーリス・ブランショならびにジャン＝リュック・ナンシーという、思想的連関がしばしば強調されながらも、個々のスケールの巨大さゆえに、その具体的検証がいまだ途上にある思想家たちの文学をめぐる思索を比較対照し、その交差と相違を浮かび上がらせることである。二年計画の一年目である2019年度は、ブランショがバタイユと親交を結んだ時期のテキスト『『ジュルナル・デ・デバ』誌の文学時評 1941.4 - 1944.8』の翻訳を行い、担当箇所を訳了した。翻訳と訳注付加の作業にあたり、パリ・フランス国立図書館での資料調査がきわめて有意義であった。同書は複数の研究者による共訳となるため、他の訳者の進捗状況との兼ね合いで、刊行時期は未定であるが、可能なかぎり早期の上梓を目指していく。この翻訳作業を通じて、同時期のブランショの文学理解に対する知見を深め、とりわけ『内的経験』（1943年）におけるバタイユの文学論との影響関係を探る試みを実施した。この試みと並行して、両者のより後年のテキストにおける思想的連関を浮かび上がらせるアプローチも行った。具体的には、バタイユ『文学と悪』（1957年）のカフカ論における、ブランショ「カフカを読むこと」（1945年）「文学と死への権利」（1947-48年）からの本質的影響を探り、さらには、これらのブランショのテクスト自体に、バタイユ『有罪者』（1944年）における、死と言語をめぐる記述との濃密な結びつきが窺われることを検討した。これらの研究は、一件の口頭発表を通じて部分的に成果を公表している。今後、取り上げるテキストをさらに拡充することによって、一定の結論を提示できる見込みの立つところまで研究を進捗できたと判断している。 I have finished the translation of the part I am in charge of of Maurice Blanchot's "Chroniques littéraires du 'Jounal des débats' Avril 1941 - Août 1944". I have made a presentation about the correlation between Bataille's theory of literature ant that of Blanchot.
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2019000007-20190231

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2021 年 10 月 11 日

2019 年度　学事振興資金（個人研究）研究成果実績報告書

研究代表者	所属	商学部	職名	専任講師	補助額	300 （A） 千円
	氏名	石川 学	氏名（英語）	ISHIKAWA, MANABU		

研究課題（日本語）

ジョルジュ・バタイユの文学論の思想史的意義と現代的射程

研究課題（英訳）

The historical significance of Georges Bataille's theory of literature and its contemporary importance

１．研究成果実績の概要

本研究の内容は、ジョルジュ・バタイユと、モーリス・ブランショならびにジャン＝リュック・ナンシーという、思想的連関がしばしば強調されながらも、個々のスケールの巨大さゆえに、その具体的検証がいまだ途上にある思想家たちの文学をめぐる思索を比較対照し、その交差と相違を浮かび上がらせることである。二年計画の一年目である 2019 年度は、ブランショがバタイユと親交を結んだ時期のテキスト『『ジュルナル・デ・デバ』誌の文学時評　1941.4 – 1944.8』の翻訳を行い、担当箇所を訳了した。翻訳と訳注付加の作業にあたり、パリ・フランス国立図書館での資料調査がきわめて有意義であった。同書は複数の研究者による共訳となるため、他の訳者の進捗状況との兼ね合いで、刊行時期は未定であるが、可能なかぎり早期の上梓を目指していく。この翻訳作業を通じて、同時期のブランショの文学理解に対する知見を深め、とりわけ『内的経験』（1943 年）におけるバタイユの文学論との影響関係を探る試みを実施した。この試みと並行して、両者のより後年のテキストにおける思想的連関を浮かび上がらせるアプローチも行った。具体的には、バタイユ『文学と悪』（1957 年）のカフカ論における、ブランショ「カフカを読むこと」（1945 年）「文学と死への権利」（1947-48 年）からの本質的影響を探り、さらには、これらのブランショのテクスト自体に、バタイユ『有罪者』（1944 年）における、死と言語をめぐる記述との濃密な結びつきが窺われることを検討した。これらの研究は、一件の口頭発表を通じて部分的に成果を公表している。今後、取り上げるテキストをさらに拡充することによって、一定の結論を提示できる見込みの立つところまで研究を進捗できたと判断している。

２．研究成果実績の概要（英訳）

I have finished the translation of the part I am in charge of of Maurice Blanchot's ″Chroniques littéraires du 'Jounal des débats' Avril 1941 – Août 1944″. I have made a presentation about the correlation between Bataille's theory of literature ant that of Blanchot.

３．本研究課題に関する発表

発表者氏名 （著者・講演者）	発表課題名 （著書名・演題）	発表学術誌名 （著書発行所・講演学会）	学術誌発行年月 （著書発行年月・講演年月）
石川学	自著について＋ α：ブランショとの対比を通して	バタイユ・ブランショ研究会	2019 年 6 月